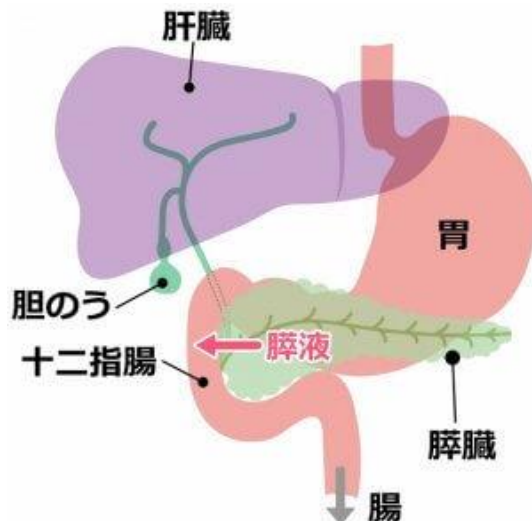


今回は急性の^{すいえん}膵炎についてです。

^{すいぞう}膵臓の働き

膵臓は胃や十二指腸の近くにある小さな臓器で「膵液」という消化液をつくり、十二指腸へ送り出すはたらきをしています。膵液にはタンパク質分解酵素、炭水化物分解酵素、脂肪分解酵素などの消化酵素が含まれており、膵液が十二指腸へ送られると、これらの酵素がさまざまな栄養を分解したり、胃液で酸性になった食物を中和したりして、腸での消化活動をスムーズにするはたらきをしています。



^{すいえん}膵炎はどうしておこるの？

消化管内で消化液として働く膵液が誤って膵臓内で活性化することで自分の膵臓を消化してしまい、炎症や壊死をおこすと考えられています。

また、犬種（ミニチュアシュナウザー、ヨークシャーテリア、コッカースパニエルなど）、肥満、食事、体質、高脂血症、薬剤、ストレスなどが膵炎発症の引き金となる可能性があります。

症状

元気がない
食欲不振
嘔吐
下痢
腹痛



祈りのポーズ

腹痛のサイン

お腹を触ると痛がる・怒る
抱っこを嫌がる
「祈りのポーズ」をする

膵炎が重症化すると、眼の白目の部分などが黄色っぽくなる「黄疸」が出たり、腎不全や糖尿病などを引き起こすことがあります。

また、血液に異常が起こることもあります。あまりにも激しい炎症が起きるため、体内の免疫機能が暴走することがあります。暴走した免疫機能は、必要としていないにも関わらず、血液を固めようと働き、結果として体内に無数の血栓（血の塊）ができるようになります（播種性血管内凝固症候群）。

この血栓ができることでショック状態に陥ったり、臓器内の細い血管に詰まって、様々な臓器が傷つけられて、死に至る可能性もあります。

診断

血液検査



膵炎マーカーの測定
炎症マーカーの測定
肝臓、腎臓、止血に
関する検査

超音波検査



膵臓の腫大、形の異常
膵臓周囲の臓器の異常

治療

点滴・投薬治療

痛みや炎症を抑えるため、まずは点滴をして膵臓や全身の循環を改善させます。腹痛がある場合には痛み止めを、嘔吐がある場合には吐き気止めの薬を積極的に使用します。



絶食・絶水

食事や水を口にすることで膵臓が活発にはたらいてしまい、炎症を悪化させてしまう可能性があります。膵臓を休ませる目的で、少しの間（3日以内）口からの食事や飲水は控えるようにします。

食事療法

吐き気がおさまったら、食事療法を開始します。脂肪分の多い食事は膵臓に大きな負担をかけるので、「低脂肪食」を少量ずつ与えるようにします。吐き気が強く、食欲もない場合には、消化管にチューブを入れてそこから流動食を与えたり、点滴に高栄養の輸液剤を投与することもあります。

重症化した場合命にかかわる危険な状態のため、入院による集中した管理が必要となります。膵炎は一度治っても、体質や持病などによって繰り返してしまうこともあるので注意が必要です。

院長のコラム



以前は膵炎の診断は容易ではありませんでしたが、最近ではエコー検査の進歩や新しい検査法により診断が容易になってきました。特に猫は一般血液検査（アミラーゼ、リパーゼなど）では診断することができず、臨床症状においてもヒトや犬のように急性の腹痛や嘔吐などの症状が少ないため診断が難しいといわれてきました。しかし最近新しい検査法（膵特異的リパーゼ）やエコー検査により以前より診断されることが多くなりましたが、やはり見逃されていることも多いと思われます。

古川動物病院では以前より膵臓の診断、特にエコー検査による膵炎診断の臨床研究を数多く行ってきており、膵炎の診断においては診断能力が高い病院と自負しております。